

武蔵野日曜集会 降誕節

天国体

――ヨハネ伝1章26～43節――

1995年12月24日

小池辰雄

世界の歴史を両断している人 聖霊のバプテスマ 無者即無限無量者 神交 お伽話以上の現実 私の中に天国がある 遠慮なくキリストと一つになればいい 天国体の人は必ずそこへ入れられる キリストの直弟子

【ヨハネ1・26～43】

26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』……

29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。30 われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。31 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり。32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鳩のごとく天より降りて、その上に止れり。33 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。34 われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

35 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、36 イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊』。37 かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、38 イエス振反りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』彼等いう『ラビ（釈きていえば師）いずこに留り給うか』。39 イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。40 ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。41 この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ（釈けばキリスト）に遇えり』と言いて、42 彼をイエスの許に連れきたれり。「イエス之に目を注めて言い給う『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（釈けばペテロ）と称えらるべし』。』



43 明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに従え』……

●世界の歴史を両断している人

今日は今年の最後の集会です。クリスマスとはキリストのメッセ——「マス」というのはお祭ということ——「キリスト祭」というわけです。クリスマスはそういう喜びの祝いですが、単なる喜びではない。イエス・キリストという方は大変な方です。私は、キリストはどういう人かというところ、

「大変なひとだ」

と言うよりか他に言いようがない。全く、キリストの前には平伏す他には何もない。お釈迦さんもソクラテスもそれぞれの大変さをもってますが、キリストの大変さはケタが違います。これは東西古今にキリスト一人という、全くの例外者です。イエス・キリストという方は歴史を両断したひとです。キリスト以前の歴史とキリスト以後の歴史の、キリストはその焦点です。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。」

と言われた。キリストは火を投ぜんためにいらつしやつた。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべき

バプテスマあり。」(ルカ12・49～50)

十字架のことです。十字架と聖霊の火は離すことができない。そういう存在です。キリストは十字架に架からんがために、聖霊をみなに与えるために、やって来られた。このような人は歴史上にキリストの他にいない。世界の歴史を両断している人です。そういう焦点的存在なんです。我々は何も説明なんかできるものではない。聖書を読んで平伏すだけです。

●聖霊のバプテスマ

ヨハネ伝1章に、

26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』……29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。』

「世の罪を除く神の羔羊」とは不思議な言葉です。

30 われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。

誰よりも前に霊界におられた。それが地界に現れた。

31 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたり



て水にてバプテスマを施すなり』。³² ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、^{はと}鳩のごとく天より降りて、その上に止れり。^{とどまつた}

聖霊が鳩の形で天からくだつてきて、その人の上にとどまつた。

³³ 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。³⁴ われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

キリストのバプテスマというのは、聖霊で施すので、水でバプテスマするのではない。我々はキリストから聖霊のバプテスマを受けるまでは、本当に救われたとは言われない。しかし、聖霊のバプテスマを施す前に、キリストは十字架に架かってしまう。御霊のキリストが聖霊のバプテスマをなさる。だから、十字架と聖霊とは離すことができない関係にある。十字架に架からんがために生まれた。クリスマスなんて、決してただ喜ばしい日ではない。自分の生命を十字架に架けるために生まれた。特別な死を死ぬために生まれた。

³⁵ 明るる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、³⁶ イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊』。³⁷ かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、³⁸ イエス振反りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』彼等いう『ラビ（^{ふりかえ}釈きていえば師）いずこに留り給うか』。³⁹ イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。⁴⁰ ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。⁴¹ この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ（^釈ければキリスト）に遇えり』と言いて、

「メシヤ」はヘブライ語では「マシーアッハ」というけれども、

「油そそがれたる者」

という意味です。聖霊の油です。聖霊は油に例えて言う。

⁴² 彼をイエスの許に連れきたれり。

「イエス」という名前は「イエホシュア」といって、

「神は救なり」

という意味です。

イエス之に目を注めて言い給う『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（^釈ければペテロ）と称えらるべし』。⁴³ 明るる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに従え』……

●無者即無限無量者

とにかく、イエスの言っていること、なさったことはひとつも無駄がない。大変な方で



あります。カナの婚宴では、葡萄酒が尽きたら、「水を持ってこい」と言つて、水を持ってきたところが、それがもう葡萄酒に変わつていたなんて。非常に創造的な霊的な力をもっている。我々がいくら考えたつてどうにもならない。霊的、生命的、霊的創造者です。こういう驚くべき方です。これは東西古今にキリストの他に一人もない。

日本の聖徳太子はだいたい違った人だったけれども、またケタがちがう。和は環に通ずる。聖徳太子は和をもつて第一に重んじた。仲良くして喧嘩しない。ところが、

「平和を与えに来たのではない。自分は分争だ」

とキリストは仰つた。本当の和は神さまとの関係――神さまとキリストと自分との関係――この縦の関係ができない限り、人間の相互の和はいつわりの和です。本当の和はそうしなければ来ない。平和運動なんて言つたつてダメなんだ。

政治家であろうと、何であろうと、神さまの前に平伏さない魂はみんなダメなんです。その点で、神さまの前に平伏した大政治家が19世紀に三人いる。グラッドストーン、ビスマルク、リンカーンです。彼らは本当に神の前に平伏した魂です。

そんなのは日本にいないね。日本はダメだよ。本当の意味で宗教の世界を身につけてなければ、何をやつたつてダメなんです。政治であろうが、経済であろうが、福音に出来ないりダメです。日本にはそういう意味で望みがない。

キリストという人は単なる宗教家ではない。神さまのことを

「父なる神。お父さん」

と言っている。それで一切、父なる神の言うことを聞いてそのまま行動していた、そのまま語っていた。だから、キリストは全く無者なんだ。自分は何ものでもない。

「われ何ごとも為し能わず」

と仰つた。キリストは本当の無者なんだ。そして、これは無限無量者なんだ。限りがない。本当に無者となると、神さまの無限無量が入ってくる。

我々は自分で無者になれない。キリストから無をたまわる。キリストは、

「お前の根底に無をやるぞ」

と言う。自我にとらわれない本当の世界、我無き世界です。無者は無我者なんです。そして、キリストを受けると今度は本当の我になる。我ならざる、我にされている。そういう「絶対矛盾の自己同一」ということ。これは西田さんの哲学の言葉です。

●神交

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という内在関係、これが本当の現実なんです。「信仰」ではダメなんだ。キリストという神の現象体と霊的な交わりをいただく。「神交」と書く。これが我々の本当の現実です。信じ仰いでいたつてダメなんだ。



マリヤにはヨセフという夫がいたけれども、マリヤはヨセフとのいわゆる交わりをしないで、聖霊がやってきて、御霊の力でマリヤから子供が生まれた。それがイエスなんです。特別な生まれ方をなさった。

「未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。」

(ヨハネ1・18)

という不思議な言葉がある。「神の懷にいた」と。霊的な神さまは誰も見えない。霊界の秘密、秘義ですから。

26 ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。27 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず』……

29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。30 われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。

「これは大変なひとで、世の罪をみな除く」

という。十字架の贖罪がそれです。私の過去・現在・未来の罪を――罪の主体は自分自身です――キリストは、

「私はそれを全部贖ってしまった。心配いらん。ただ私のところに来なさい。私の中に入りなさい」

と仰る。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

というパウロのあの現実が本当の神交の世界です。信じ仰いでいるのではない。信じ仰いだってダメなんだ。

「私は信仰なんかありません。何もありません。キリストに圧倒されて生きているだけです」

と、これが本当の告白です。キリストに圧倒されて、躓いても転んでも、キリストは立たせてくださる。「圧倒」というのは素晴らしい言葉だ。ぶっ倒される。人をぶっ倒しておいて、そして今度は立ち上がらせる。これがキリストの恵みなんです。

「ぶっ倒す」ということの内容は、

「自分自身を我無き人にする」

ということですよ。我無き人にされると、本当のキリストにおいての我になる。「われキリストの中に」の世界です。「の中」でなければ。キリストと内在関係にならないとダメです。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

とパウロが言ったが、あの消息は本ものだ。キリストの弟子ではパウロは凄い人です。パウロの書翰はよく読んでくださいよ。ヨハネもパウロもそれぞれの善さをもっている。



●お伽話以上の現実

水を葡萄酒にしたり、キリストというひとは大変なひとだ。パンが足りなければ、そこで祈って新しく造ってしまおう。これは普通のお伽話もかなわないですよ、お伽話以上の現実です。ヨハネ伝6章に、

「¹⁰イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草ありて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。¹¹ここにイエス、パンを取りて謝し、坐したる人々に分ちあたえ、また肴をも然^{しか}なして、その欲するほど与え給う。¹²人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『^{すた}廃るもののなきように擘きたる余をあつめよ』。¹³すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの擘きたるを食いしものの余、十二の筐^{かご}に満ちたり。¹⁴人々その為し給いし徴を見ている』
『^げ実にこれは世に来るべき預言者なり』。

預言者どころのさわざではないよな。

¹⁵イエス彼らが来りて己をとらえ、王となさんとするを知り、復ひとりにて山に遁^{のが}れたもう。

おもしろいことが書いてあるね。

¹⁶夕になりて弟子たち海にくだり、¹⁷船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわず。¹⁸大風ふきて海ややに荒れ出づ。¹⁹かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給うを見て懼^{おそ}れたれば、²⁰イエス言いたもう『我なり、懼るな』。
²¹すなわちイエスを船に歓び迎えしに、船は直ちに往かんとする地に著けり。』

(ヨハネ6・10～21)

湖の上を渡っていくような人だからね。我々はキリストの中に本当に平伏して祈り入らなければダメです。祈入です。こっちから祈っているのではない。祈りながらキリストの中に自分を投げ入れる。祈入投身です。そうしたら、凄い力がくる。力も智慧もくる。どこか調子が悪くたって、身体の調子だつて治つてしまふ。なにしろ、キリストというひとは生命の生命だからね。力の力、愛の愛、光の光です。そういうのがあなた方一人一人のキリストだということを本当に身体で受けとつてごらん。凄いことになるから。頭ではダメです。いくら考えたつてダメです。全存在で受けとる。説明はなににも要らん。体験だけ。体験すると体現する。身体に現れる。そういう世界です。

「我を食らえ、我を飲め」

とキリストは言っている。

「我を食い、我を飲まなければ、生命はないぞ」(ヨハネ6・53)

と、ああいう凄い言葉を発しているんだからね。



●私の中に天国がある

マタイ伝3章、

「9 汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言わんと思うな。我なんじらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起こし得給うなり。10 斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし。11 我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその靴をとるにも足らず、彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。……

「聖霊と火」という言い方は聖霊の火と同じことです。

16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見給う。17 また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』(マタイ3:9～17)

だから、これによく聞き従えと。

また、サタンが現れる。こういう時にはサタンがやつてくる。マタイ伝4章、

「10 ここにイエス言い給う『サタンよ、退け「主なる汝の神を拜し、ただ之のみ事え奉るべし」と録されたるなり。』11 ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち来り事えぬ。…… 17 この時よりイエス教を宣べはじめて言い給う『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』(マタイ4:10～17)

「なんじら悔改めよ、天国は近づきたり」

とは、キリストが天国体なんです。

「天国は近づいた」

というのは、

「私の中に天国がある。私を受けとらなければ天国なんて言ったってダメだ」ということ。キリストというひとは天国体なんだ。

私は孫娘のお墓にイタリア語で「パラディソ」(PARADISO)と書いた。パラダイスのことです。

「これはお墓ではない、パラダイスだ」

と。ダンテの『神曲』の中にある「パラディソ」です。「お墓」なんていう言い方はしない。パラディソの入り口だ。「お墓参り」なんて言わない。

「パラディソ参り」

です。我々は死なないんです。往生するんです。あちら側に往って、そして生きる。場所を変えるだけです。

「死ぬとは隣の部屋にいくようなものだ」
とヒルティも言った。



●遠慮なくキリストと一つになればいい

福音書のマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、この中にキリストの言つてらつしやること、為さつたことを――何と言つたつて福音書は新約聖書の中心ですから――よく読んで、キリストと一つになってください。それは楽しいから。意味の世界ではない。生命の世界、光の世界、愛の世界だから。遠慮なくキリストと一つになればいい。一如になる。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

とパウロが言つた、その現実を我々一人びとりが本当にやっていかなければ。我々がダメだからこそ、キリストが入つてくださるのだから。こつちが整える必要はひとつもない。

「われ汝を棄てず。人々がお前を棄てても、私はお前を棄てないよ。人々がみなお前を忘れても、私はお前を忘れないよ」

という。キリストは我々一人一人にはつきりとそういうことをしてくださる方であります。

「人にどう思われようと、人にどう扱われようと、一向差し支えないではないか。

そんなことは気にするな」

と。もう、

「ありがとうございます」

と言つて、平伏してキリストの中に入るよりか道はない。これが本当の

「恵福なるかな」

です。恵まれたるさいわい입니다。いわゆる幸せとか幸福とかいうことではない。

「恵まれたるかな」

でよろしい。

●天国体の人は必ずそこへ入れられる

マタイ伝5章、

「8 恵福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

9 恵福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。

10 恵福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。」(マ

タイ5:8-10)

「義」というのは、神・キリストの御意に従つて行動することが義なんです。いわゆる道徳的な正義ではない。「さいわいなるかな」とは「恵まれたるかな」ということで、恵福です。次元がこの世の言葉の次元とは違う。

我々はそういう意味で天国体です。地上において既に天国体だから、黙示録の終りのように、神の国が、新天新地が来たときに、天国体の人は必ずそこへ入れられる。

聖書は大変な本だ。新天新地の消息がヨハネ黙示録21章から始まっている。

「我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、



海も亦^{また}なきなり。……⁵斯^{かく}て御座^{みくら}に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切^{あつた}のものを新にするなり』また言いたもう『書き録^{しる}せ、これらの言^{ことば}は信ずべきなり、真^{まこと}なり』。⁶また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渴^{かわ}く者には価なくして生命^{いのち}の水の泉より飲むことを許さん。』(黙示録21・1～6)

聖書は権威あるところの力強い言葉だね。聖書は思想ではない。よく「聖書の思想」と言う人があるが、思想ではない。現実^{現実}なんだ。聖書は全部、現^{うつ}の世界です。「聖書思想」なんて冗談じゃないよ。そういう霊的な現実^{現実}に、聖書を読みながら入ってごらんさい。もう楽しくてしょうがないし、力が来てしょうがない。どんな本だつて、聖書一卷には、特に新約聖書にはかなわない。

旧約聖書では預言書です。その中で特に素晴らしいのはイザヤ書です。また、楽しいのは詩篇です。やはり、イスラエル人は選^{えら}びの民だね。ところが、いわゆるユダヤ人は新約聖書を受けとらないで、旧約だけだ。ダメだよ。旧約は本当は新約の前段階ですから。

聖書は飽きない。本当は、暗記するくらいに読めばいいんですが、私は暗記がまずいからダメだけれども。ヨハネ福音書というのは素晴らしい。

「太^は初^{はじめ}に言^{ことば}あり、言^{ことば}は神^{かみ}と偕^{とも}にあり、言^{ことば}は神なりき。」(ヨハネ1:1)
これは凄い言葉だね。

そのうちに新約聖書の私自身の訳を書くかもしれませんが。現行の訳はまだるっこい訳し方をしているから。いわゆる文法を超越した訳し方をしてやる。キリストの使徒たちも旧約の読み方は、いわゆる旧約の人たちが書いたのと違うんです、キリストをいただいたいるから。私の著作集の第一巻と第二巻は大事な本ですから、そのうちに読んでみてください。特に第一巻『無者キリスト』の「言い逆らしいの徴」というところにいろいろ書いてあります。

●キリストの直弟子

とにかく、我々はキリスト直結、神交^{しんこう}の現実^{現実}はキリストの直弟子たちと同質、そこにいかなければつまらんです。これはもう、本当に十字架を受けとり本当に聖霊を受けとれば、我々自身がキリストの直弟子であります。クリスマスを我々はそういう意味で迎えたということは大事なことです。

無^む、即^{すなわ}ち無限無量^{むげんむりやう}ということ。相対的な有の世界はダメなんです、絶対的な無の世界に入らないと。そうすると、これは無限無量になる。その無もいわゆる悟った無ではない。たまたわりたる無です。キリストの前に本当に平伏せば、その無がやってくる。もう自分なんか無くなってしまう。そうすると、グーッと来たらキリストの中で、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というパウロの現実になる。



その点では何と言ったって、パウロは弟子のうちの第一人者だね。ヨハネというのはスーッと入っていく人だが、パウロは劇的に入っていく人だ。稲妻のようなやつだ。ダマスコ途上でひっくり返された男だからね。パウロ型でもヨハネ型でもいいですよ、本ものになれば。ペテロではちよつと困ったな。パウロかヨハネです。そして、一人の人があるいはパウロとなり、あるいはヨハネになれるんです。

この福音書を読んでいると楽しい。どんな本もこの聖書にはかなわない。特にこの新約聖書と、それから旧約の預言書です。預言書もイザヤです。また、エレミヤもなかなかいい。エゼキエルというのは神秘的なところがある。福音書の旧約の前段階はホセア書です。

武蔵野日曜集会 降誕節夕祈祷会

神・キリスト讃美

「アナテマ魂」「日本よ、何処へ行く？」 神・キリスト讃美 無条件にすぐ受けとればいい道だから自分で歩いてみる そうなのが武蔵野幕屋

●「アナテマ魂」

皆さんと一緒にこのように武蔵野集会らしくクリスマスを迎えて、たいへん楽しくあります。ありがとうございます。

ところで、私の書いた『使徒らの昔を慕いて』（独和対照）の中に「アナテマ魂」という文章があります。

「パリサイ派の一首魁しゅがいであつたパウロは、

彼が聖霊によって全く別人となつてから、

ユダヤ人をパリサイ根性から福音へと救いたと思った。

それで彼は呻うめいて叫んだ、

「わが同胞のためならんには、

キリストに呪ののわれたる者（アナテマ）となるとも、

我自ら願うところなり」（ロマ9・3）。

しかし、彼は今もなおユダヤ人からアナテマあつかいにされている。



否、実にキリストこそは今もなお十字架上のアナテマである（ガラテヤ3・13）。
聖霊のバプテスマをキリストから受けたまことのキリスト者が（ロマ8・9）、
聖霊の体験なきキリスト教界一般において謂わばアナテマとされている。

「誘^{そし}らん者にはその誘^{そし}るに任ず。

嗤^{わら}はん者にはその嗤^{わら}ふに任ず。

天公本^{もと}より我を知る。

他人の知るを覚^{もと}めず。」

幕末の大先覚佐久間象山はこのような詩句を吐いている。

まことに「天公本知我」。アナテマ魂で祈らんのみ（ルカ6・28～36）。

「天公」とは神さまのことです。

「神さまは本^{もと}より私を知っている」

と。佐久間象山のこの気魄は我々と同じであるという意味で私は書いたわけです。

どうぞ、そんなことで、我々はどう思われようと、キリストに喜ばれることだけが最大の
問題です。神さまは、

「われ汝を喜ぶ」

とキリストに言われた。そのようにキリストに「われ汝を喜ぶ」と我々一人びとりが言わ
れないとね。

●「日本よ、何処へ往く？」

また、「日本よ、何処へ往く？」という文章に、

「第二次大戦後日本には所謂「民主主義」が拡まった。

その間日本人は孝道も師道も殆どこれを保持しなくなった。

雨後の筍^{たけのこ}の如くあまりにも多くの大学ができた。

幼少年期から青年期に互^たつての

度び重なる烈^{はげ}しいさまざまな入学試験競争のために、

若者たちは心身共に内的にまた外的に害^{やい}われている。

日本の学校諸制度のこのような一般状況が

若者たちの精神的なさまざまな逸脱の原因をなしている。

国電の車内には「シルバー・シート」（銀席）が

老人や身体障害者のため備えられてある。

ところが若者たちが顧慮することなく、

文字通り「前方不注意」で腰かけているのが一般である。

これが日本の「民主主義」のすがたを

象徴的に証しているというものである。



これはしかし利己的な「まちがった自由」といふべきもので、謂わば身勝手主義である。

日本人の生活には、多くの無駄ごとや非有機体的なもの、無秩序や矛盾の諸相がある。

日本よ、何処へ往く？

日本人よ、いざ、たましひの源泉に立ち帰ろう！

日本人よ、いざ、神の前に平伏そう！

情緒ゆたかな同胞よ、我らは隣人愛に生きよう、

おたがいに、そしてどの民族とも！

愛なき民主主義は無意味である。

神に投げ身して愛の力を受けよう！」

「民主主義、民主主義」

と言うけれども、愛がないような民主主義は問題にならない。「主義」という言葉は私は嫌いなんだ。

「イズムはダメだ」

と、ゲーテも言っている。

「いわゆる主義、主張を棄てろ」

というわけです。

とにかく、地上を去るまで福音のためには戦っていきます。皆さんと一緒にそのようにして、非常に気魄に満ちたクリスマスを迎えて感謝いたします。

●神・キリスト讃美

神讃美ということは一番大事なことです。こちらがどういう状態にあっても、神・キリストを讃美すること。こっちの状態がおかしかりうがよかりうが、そんなことに関係なしに、ただ神を讃美する。讃美しているうちに本当の救の中に入ってしまう。喜びの中に入ってしまう。力の中に入ってしまう。

だから、讃美歌というものは、ただ歌うばかりでなくて、我々の心が常に讃美であるということ。その意味で讃美というのは大事なことです。自分自身が讃美歌になってしまう。讃美歌的存在になる。調子が悪かりうが、困るうが、ただ讃美です。そうすると、本当に天国的な現実が変わっていく。これは不思議なものです。だから、へこたれることがない。行き詰まることがない。

「どうも今日は…」

なんてことはなくなってしまう。この現実はもの凄い。讃美せしめられる。なにも無理して讃美していいのではない。讃美せざるを得なくなる。



この「ざるを得ない」という言い方は非常に大事な言い方で、ヒルティもそう言っている。
「この他にやりようがないという生き方が本当の生き方だ」と。

「かくせざるを得ず」

という生き方です。マルティン・ルッターがヴオルムス国会に呼ばれて告白したときに、

「私はかくあらざるを得ない。(告白せざるを得ない。何と思われようとかまわない)。神、

私を助け給わんことを」

と、法王の使者たちの前ではつきりそう言った。ローマン・カトリックに対してルッターが福音の角度から

「^{しか}然らず！」

と言った。あのルッターの戦いは素晴らしい。彼はやはり宗教改革者だよな。棄身の戦いだから。アッシジのフランチェスコも素晴らしい人だな。ローマ法王に対してもはつきりものが言えた。

キリストにある交わりをお互いに深くして、そして一緒にキリストを讃美することが大事です。戦いと讃美とはひとつも矛盾しない。いわゆる「主義」に固まってはダメです。私は何も立場がありません、頭場があります。上からちゃんと、天界からの力で上に引き上げられる。

●無条件にすぐ受けとればいい

「永遠の女性なるものが我らを引き上げていく」

という句が『ファウスト』の終りの句にある。男性がダメだから、これを女のかたが引き上げてくれる。女性の方が本当の世界をもっているというわけです。女性の方が福音を純粹に受けとる。男は理屈っぽくてダメなんだ。すぐ理屈を言ったり、考えたりするから。考える必要はない。無条件に直接にすぐ受けとればいい。

「キリストが水の上を歩いて行った」

というと、

「そんなことがあるか？」

なんて思う。「そんなことがあるか」ではない。

「キリストだから、そういうことができるんだ」

と、こういうようにはつきりと受けとらなくてはいいかん。いわゆる物理法則を越えているんですよ、キリストは。それでその現実には平伏すんだ。

「これは凄いなあ」

と言って、キリストの中に入ると、自分もそういうような現実に入れそうな気持ちになる。うっかり真似してはダメだよ、沈んでしまうよ。そんなたやすいものではないんだ、キリ



ストの霊的な現実というものは。

イエスというひとは大変なひとだ。キリストはどういう人かという、私は

「大変なひとだ」

と言う。説明なんかしない。これは大変なひとだと。

「大変な人とはどういうことか？」

なんて聞かれても、

「わからない。説明なんかできるか」

と言う。そういうように、驚嘆して圧倒されて聖書を読むと、本当に聖書の現実にはいる。

「こういう事があるだろうか？」

なんて、そんなことを考えているうちは、絶対に入れない。そういう気合が分かりますか。そうしたら、聖書は楽しくてしょうがないし、力が来てしょうがない。

●道だから自分で歩いてみる

聖書は大変な本だよ、特に新約聖書は、旧約の預言書と新約聖書は。パウロの書翰もみな告白ですからね、教えてなんかいやしない。みな告白なんです。キリスト教ではない。キリスト道、道なんです。実際に自分で歩かなければ分からない世界なんです。

「これは道だから自分で歩いてみる」

ということですよ。

ゲートという大詩人はそういう角度で聖書を読んでいた。註解書なんか要らない。そんな凄腕を研究したって、ゲートはつかめるかというんだ。冗談じゃない。ダンテにしたってそうです。超一級の詩人たちはみなそういう世界に霊的に入っている人です。

「法華経を身読しんどくせよ」

と日蓮が言った。研究でなく、身読しなければダメです。

本当の超一流の人たちはいわゆる理屈ではない。全存在で受けとっている人です。我々も全存在で受けとっていく。文字の意味なんかどうでもいいんだ。その奥の響きを受けとる。音楽と同じだ。音楽を本当に身につけている人は、私は聖書は読みやすいと思っているね。聖書を音として読む。天来の響きとして読む。それだから読めてしまう。音楽家の方が読める。いわゆる研究者はダメなんだ。

「主さまー！アーメン、ハレルヤー！」

と。どうぞ、そんな気持ちでもって武蔵野幕屋の方々は威勢よく楽しくいきましょう。私はそう簡単に死なないからね。今、91歳だが、まだまだ100歳を突破するから。この調子では百歳を突破せざるを得ない。力が来てしょうがない。何を食べているから何を飲んでいるからではない。

あなた方、どうやって祈っているんだ。私は非常に簡単なんだ。



「主さま!」

と。それで祈りはおしまい。「主さま!」という一言で、魂の奥底で無言の叫びをすると、そのままキリストの中に入ってしまう。キリストと一つにならなければダメなんだ。一如です。一つにさせられる。引き上げられる。投身する。そうすると、あとは何かというと、

「アーメン、ハレルヤ!」

だけ。

「主さま! アーメン、ハレルヤ!」

というのが私の祈りになる。簡単明瞭。言葉なんかいりはない。キリストは、

「よし! 私と一つだ」

と言って受けとってください。パウロと同じです。それが私のいわゆる信仰ならざる本当の神交です。信じ仰ぐのではない。神・キリストとの交わりです。

●そういつのが武蔵野幕屋

こういうことを一遍テレビでしゃべってやろうかな。

「あれは気違いではないか」

なんて思うかもしれない。それは気が違っているよ、普通のとは。ところが、これが本当の気の世界なんです。霊気の世界です。

「わがうちなるキリストの生命が見えるか」

というわけです。はつきりそう言える世界です。武蔵野幕屋の方々はみなそのような器である。私は信じて進んでいきます。問答無用の世界です。

私は主義は嫌いだ。主義に固まったらダメです。私は何もない、空っぽです。空っぽなところに本ものが入ってくる。皆さん、

「自分の信仰」

なんてなにも考える必要はない。

「信仰なんかありません。何もあります。キリストに圧倒されて生きているだけのはなしです。信仰なんて知りません」

とはつきり言ってる。それでいいんだ。普通のクリスチャンは

「へえー!」

とびっくりする。

私の気持があなた方はもちろん分かるだろうね。分かんと言ったって頭ではないよ。そういうのがこの武蔵野幕屋というんだ。天下に他にありはしない。どうぞ、そういう気持で勇ましく楽しく、聖書を食らいながらいきましょ。また来年もいよいよその調子でもつてね。

